

近世墓塔の変遷

—新座市普光明寺墓地における一分析—

上條 陽子(旧姓 山田)

(一九七七年度卒・渡辺ゼミ)

一 はじめに

この度、『新座市史民俗編』編纂の作業の一つ、市内大和田・中野地区の両墓制調査において石塔の調査が行なわれ、これに参加する機会を得た。この地域における両墓制の実態とその成立についての解明が調査の目的である。本稿はその一過程として、石塔の調査資料をもとに、一部の項目についてではあるが、数量的分析を試みた。これによって、近世から現代に至るまでの墓塔の変化をたどり、墓塔の持つ意味の移り変わりについて考えていきたいと思う。

埋葬地については、大和田地区の場合、地区内の帖上、三本木の二ヶ所である。ただし、火葬への移行により、これらの場所への埋葬は数年前から行なわれなくなっている。一方、墓塔は、大和田にある新義真言宗福寿山普光明寺の境内に造立されている。

普光明寺の石塔の全体数は、約千八百基ほどと思われる。しか

し、戦後の墓地拡張による区域にわずかに未調査のブロックを残しており、今回分析の対象としたのは、三十九ブロック中、三十三ブロック千五百二十三基である。それぞれの墓塔の年代については、建立年を原則としたが、それのない場合は没年をとった。しかし、建立年の刻記が始まるのは江戸時代末期になってからであり、ほとんどが没年によっている。また、二名以上の連記で、その上、建立年がない場合には、その内で新しい方の没年を用いている。集計は十年単位で行なった。以下の項目においては、それらを適宜まとめて用いている。当然のことながら、これから述べていくことは、残存している墓塔によって得られたことであり、特定の年代、型式等の墓塔に対する大量の排毀等がなかったことを前提としている。そして、この前提は十分成立する事実であるといえる。また、「石塔」という用語は他の信仰対象物など広範囲のものを含んでしまうため、ここでは「墓塔」の語を用いているが、本稿で扱ったものはすべて石造物である。以上のことを最

初におことわりしておきたい。

二 墓塔の型の変遷

1 型式の変化

墓塔の型式は、年代によって表1に見るような変遷を示している。

この墓地内で最も古い型は板碑で、応仁元年（一四六七）、天文十五年（一五四六）の銘をもつものと、損壊による年代不明のもの三基が今回の調査で発見された。しかし、普光明寺の板碑については、境内の他の地点からの出土例もいくつも見られ、本稿のテーマからははずれるので、これ以上の言及はしない。なお、箱型石塔で元龜元年（一五七〇）銘のものが一基ある。これは、二代將軍徳川秀忠に仕えた芝山正員の父、芝山彦十郎政勝の墓塔で、型式、石質その他から見て、江戸時代中期以降の作であることは間違いない。また、廃寺から移されたと思われるものである。

近世の墓塔としては、寛永期の五輪塔、宝篋印塔が最初に現われる。そしてすぐ、十七世紀中期に仏像碑や板碑型石塔等の初現を見る。これらは急激に数を増していき、表2で明らかのように、このころ全体的な造立数も飛躍的に増加している。その一方で、五輪塔、宝篋印塔は、ほぼ十七世紀の間のみで姿を消していく。この墓地内の五輪塔、宝篋印塔、無縫塔には銘文の刻まれたものが数多く見られた。そして、銘文のあるそれらの型式の

表1 型別年代別造立数

単位：基

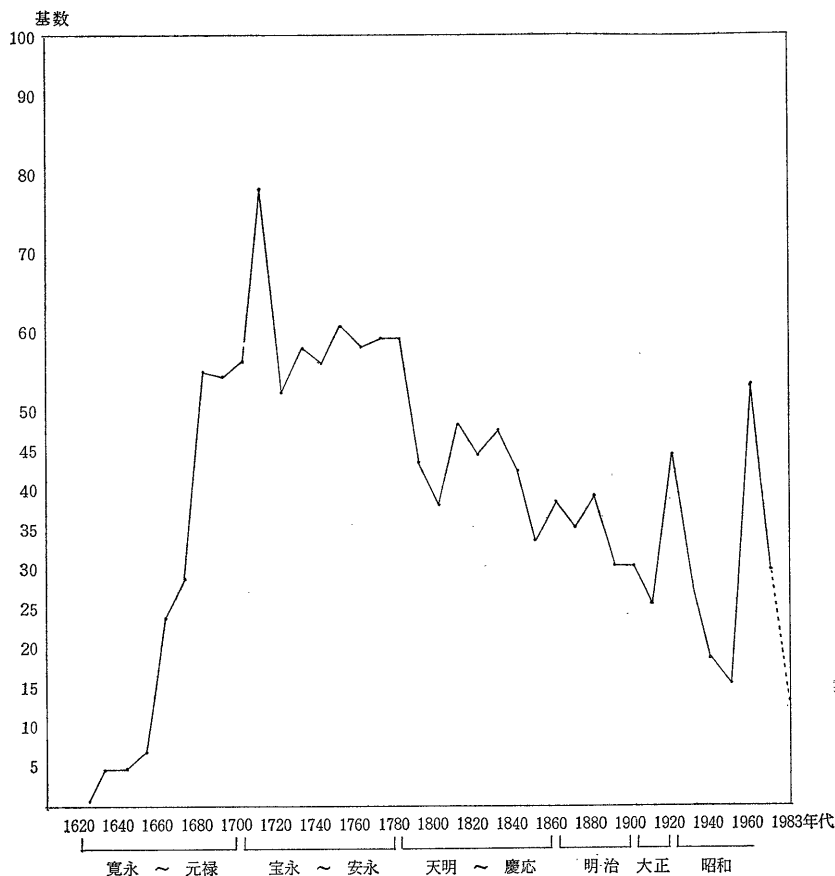
型 年代	板 碑	五 輪 塔	宝 篋 印 塔	仏 像 碑				無 縫 塔	板 碑 型	駒 型	箱 型	位 牌 型	角 柱	そ の 他	灯 籠	型 不 明	計
				丸 彫	舟 型 光 彫	背 浮 彫	そ の 他										
室 町 期	2										1						3
1620~1630 寛 永		5	1														6
1640~1660 寛永末~万治		3	10	1	10			1	10	1		2					36
1670~1690 寛文~元禄		2		1	100			1	33		1	2					140
1700~1730 宝永~元文		1		2	136	1		1	56	8	30	5	7			1	248
1740~1770 寛保~安永				1	47	9		3	13	6	132	5	19	1		1	237
1780~1820 天明~文政					14	8		1		3	155	15	40	1			237
1830~1860 天保~慶応				3	3	1		1			62	5	96	1	1	1	174
1870~1900 明 治				1						1	21		107	8			138
1920~1983 大正~		1								1	9		178	41			230
年代不明	1		2	10	23	1				1	18	1	6	7	1	3	74
計	3	12	13	19	333	20		8	112	21	429	33	453	59	2	6	1,523

うちの大部分は僧侶の墓塔であったということに、ここで注目したい。このことから、この地域において庶民階層の墓塔造立が始まるのは、十七世紀中期に入ってからであり、それは急速に一般化していったということを推察することができるのである。

十八世紀に入ると種々のヴァリエーションを持った型が出現してくる。全年代を通して見ても、このころが最も多種類の墓塔が造立された時期である。しかし、その中で、初期には大多数を占めていた舟型光背浮彫仏像碑と板碑型石塔が中期には極端に減少し、急増してきた箱型石塔に主位を譲る。板碑型石塔は天明期以降まったく見られなくなる。型の上から考えると、このころから次第に墓造塔立の意義に変化が表われてきているように思われる。

江戸時代も末期になるに従い、四面に刻銘可能な角柱型が数を伸ばし、最も一般的な型式となっていく。角柱型石塔は頭部の形態から、尖頭型、円頭型、純角柱型などに分類可能で若干の年代的差異も見られるが、本稿では一

表2 墓塔造立数の変化



括して考えている。

明治時代以降、造立される石塔の八割近くは角柱型になる。この傾向は、他のそれまで主位を占めたことのある型が、出現すると爆発的に増加し、そして急激に減少していったことに較べると、緩慢な変化だったといえる。しかし、それまで造立されていたいくつかの型式が、江戸時代が終るのと時期を同じくしてまったく姿を消してしまったということは、明治維新を経て、人々の生活、意識に前時代とは断絶的ともいえる大きな変化があったことを想像できる。

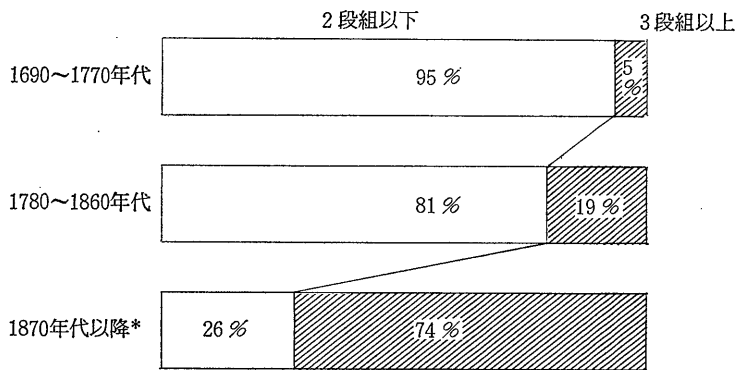
大正と昭和では大きな変化はないが、第二次世界大戦後になると、造立された墓塔の内に角柱型の占める割合は、それに付随する墓誌の数を除くと、全体の九十五%にのぼるようになってくる。最近新設された墓塔は、画一化された、ほぼ同形の角柱型のみというのが現状のようである。

2 段数の変化

近代以降、現代までの間に造立された墓塔には、四段や五段組のものが比較的多く目につくようであるが、これも年代的に変化のあることがうかがわれる。箱型と角柱型について、二段組以下と三段組以上の割合を出したのが表3である。二段組以下というのは台座が一つか、あるいは無いもので、三段組以上というのは台座、基壇などが二段以上ついているものである。箱型の現われる一六九〇年から江戸時代中期・後期、明治以降と分けて比較してみた。

この表で明らかのように、明治以降に両者の割合がまったく逆転してしまうのである。特に一九六〇年以降に入ると二段組以下の

表3 箱型、角柱型における段数の変化



*特に1960年以降は2段以下のものは皆無

のは皆無となる。

石段を積み重ねる思想は五輪塔の系統を引いており、また、賽の河原の石積みとも相通じるものと考えられる。これはもちろん、

表4 仏像碑の像別年代別造立数

単位：基

年代	仏像名 地蔵菩薩	如意輪 観音	聖観音	阿弥陀 如来	大日 如来	薬師 如来	その他	判別困難なもの	合計
1640～1660 寛永末～万治	3	5	1					2	11
1670～1690 寛文～元禄	35	30	15	10	3	2	3	3	101
1700～1730 寛永～元文	54	41	19	5	7	1	1	11	139
1740～1770 寛保～安永	30	17	5	1	1			3	57
1780～1820 天明～文政	18	3		1					22
1830～1860 天保～慶応	5	2							7
1870 明治	1								1
年代不明	18	7	2	1	2	1		3	34
合 計	164	105	42	18	13	4	4	22	372
割 合 (%)	44.1	28.2	11.3	4.8	3.5	1.1	0.8	5.9	

人々の心の根底にある無意識的なものであろう。しかし、年代が下るに従ってこれが増加してきたというのは、どのような理由によるものなのであろうか。

表5 仏像碑の性別等造立割合

単位：%

性別等	仏像名 地蔵菩薩	如意輪 観音	聖観音	阿弥陀 如来	大日如来	全 体
男 性	41	1	29	61	92	32
女 性	7	87	67	16	8	38
幼 児	40	7		6		21
混 合	4	4	4	11		5
いずれか不明	8	1		6		4

一方、仏像碑、板碑型など初期のものでもほとんどのものに一段の台座があり、そしてこの台座には、左右に円型の、そして中央に楕円型の凹みがある。これは現在の墓塔にも見られ、このう

ち左右の凹みは、線香立てとして用いられている。これらの凹みの原初の用途ははっきりしない。しかし、線香、花、水など、墓塔に対する何らかの供物の容器として使われていたということは言えよう。このことから、遅くとも仏像碑、板碑型などの出現した頃には、確実に墓塔は礼拝の対象としての役割をともなっていたことがわかるのである。

3 仏像の種類について

仏像碑にはどのような仏像が彫られているか、それを年代順に並べたものが表4である。

仏像碑は寛永末期頃から江戸時代を通して造立が行なわれている。造立初期には地蔵・観音像のみであるが、造立数の増加とともに像の種類も数を増してくる。しかし、阿弥陀や大日如来などは、十八世紀中期以降の仏像碑の減少とともに消滅し、百年間足らずの一時的な流行に終わっている。地蔵像、観音像も十八世紀初頭を頂点に減少傾向をたどり、明治以降にはほとんど造られなくなる。

地蔵、観音像の割合は他と比較にならないほどの値であり、また長期にわたり造立が続けられた。このことは、次の項で述べることとの関連とともに、地蔵信仰、観音信仰の浸透を端的に表わしていることといえよう。

4 性別と仏像碑

性別等によって仏像の違いが見られるかどうか、パーセントで示したものが表5である。

男性の法名・戒名の刻まれた仏像碑では、地蔵像が五六%で他にも阿弥陀、大日如来、薬師如来等が見られる。それに比べ、

女性の場合、八四%は観音像、幼児は八五%が地蔵であった。地蔵は子供を庇護するものとされ、改めて述べるまでもなく地蔵信仰と子供との結びつきは強い。また、観音はその姿、顔立ち等から女性と結びつき、信仰を集めたものと思われる。

仏像碑全体についての性別等による割合は、さほど際立った差は見られなかった。しかし、この地域のこの時代の幼児死亡率がどの程度であったのかはわからないにしろ、幼児と、それ以上のあらゆる年代を含む男・女との比較で出した数値が表のようであるということは、幼児の死亡に際して仏像碑を建てる割合はかなり高いものだったといえるのではないか。また、女性の方が他に比してわずかながら比率が高いということは、何らかの理由が考えられるのであろうか。

表6にあらわれているように、男女に対しては初期から造立が行なわれているが、幼児の場合はそれより三十年ほど遅れて出てきている。また、初期には男性の為の造立数が女性を上回っているが、最盛期の十八世紀初頭、女性、幼児が増加したのに対して、すでに男性の方は減少しはじめている。幼児の為の仏像碑造立は、始められるのは遅れるが、後世まで他よりも数多く続けられている。

死者の為の仏像碑建立の理由としては、その仏、菩薩によって死者が救済され極楽に導かれることを願ひ、冥福を祈る、追善供養ということが考えられよう。その際、穢れ煩惱が多く、仏による救済がなければ往生できないものに対するほど、特に造立が多くなるのではないだろうかと思われる。もし、表5、表6に示された数値に明らかな差違が認められたならば、この考えと性の違

表6 仏像碑の年代別性別造立数

単位：基

年代	性別等	男 性	女 性	幼 児	その他	合 計
1640～1660		5	6			11
1670～1690		52	43	3	3	101
1700～1730		42	59	29	9	139
1740～1770		10	21	20	6	57
1780～1820		2	4	13	3	22
1830～1860		2		5		7
1870			1			1
年代不明		5	8	8	13	34
合 計		118	142	78	34	372

いや幼児であるということの間に何らかの関連性を想定できるのであったが、表を見た限りにおいてはそれはあまり言い得ないことのようなのである。しかし、年代的にズレが見られるということは、やはり何らかの理由があると思われる、興味深い。

三 刻銘の変化

1 種子から家紋へ

近年造立された墓塔の中には、正面の銘文上部に家紋を刻んで

いるものを多く見かける。しかし、これは墓塔造立の始められた初期から行なわれていたことではない。

表7に示したのは銘文上部に刻記されているものを年代別に比率で出したものである。全体的に見て初期のものには種子が多く、江戸時代中期には九割近くに認められる。しかし、十九世紀に入り家紋刻記が現われ始めると、種子刻記は次第に減少していく。明治時代に入ると家紋は種子の二倍を超え、大正以降には墓塔の七割に家紋が刻まれるようになる。また、一方でそういった刻記の何もないものも大幅に増加する。

種子とは仏、菩薩を標示する梵字であるから、これを刻記することは、そこに仏像を彫ることと同意義ということになる。江戸時代初期に種子や家紋などの刻記のまったく無いものの割合が比較的多かったということは、この時期の大半が仏像碑であったということと無関係ではないのではないか。箱型などが多くなる中期の頃には、種子刻記が増大しているのである。

仏像碑では地藏、観音像が多かったのだが、種子ではどのような種類が刻まれているのだろうか。これを表8に示した。三世紀を通して「ア」種子（大日如来）が圧倒的な数であった。これは一つには、この寺が真言系であることとの関連が考えられよう。

「カ」種子（地藏）は少数ながら連綿として見られるが、「キリク」（弥陀、如意輪観音、「サ」（聖観音）などの種子はそれらの像の造立が盛んだった頃に見られるのみである。

種子は仏、菩薩をあらわすものだが、家紋はその家を表わすシンボル・マークである。江戸時代になると庶民の間でも所有する建物や、ハレの日に着る着物に紋を入れることが行なわれるよう

彫りそれにより救済を願うという仏教的な要素は見当たらない。
 一つであろう。家紋を入れるということは「家」を誇示し、所属を明らかにするという気持ちのあらわれである。そこには、仏になっ

表7 種子, 家紋の年代別割合

単位: %

種 類 年 代	種 子	家 紋	無	そ の 他	損 壊 等 不 明
1620～1720 江戸時代初期	69		23		8
1730～1800 中 期	89.4	2	6	0.6	2
1810～1860 後 期	62.7	28	4.8		1.5
1870～1900 明 治	26.3	62	9.5		2.2
1910～1983 大正・昭和	4	73	23		

表8 種子の種類年代別推移

単位: 基

種 類 年 代	一 尊 種 子						三尊 種子	そ の 他	計
	ア	カ	キ リ ー ク	サ	そ の 他	判別 困難			
1620～1630	2							3	5
1640～1660	13	2	2	1	2	1		4	25
1670～1690	53	8	7	2	3	15	1	1	90
1700～1730	130	19	9	14		16			188
1740～1770	208	5	1	1		6			221
1780～1820	187	3				2			192
1830～1860	96	1				1			98
1870～1900	33	2				1			36
1900～	9	1						1	11
年代不明	19	3				3			25
計	750	44	19	18	5	45	1	9	891

家紋を刻むようになったことから、「家」意識が強まり、
 基塔自体の持つ性格や、造立にあたつての意義に変化を見ることが
 できる。

2 刻銘型式の変化

墓塔の造立数の変化は、時代時代のこの土地の社会的経済的状況やその他諸々の要因とかかわってきているものとは思われるが、一応全般的傾向を表2に見てみると、一七〇年代をピークに下降線をたどっていることがわかる。しかし、これが即、墓塔造立の衰退化ということにはつながらない。その理由の一つが刻銘型式の変化である。

表9、10を見ると、はじめ一人一人に対して建てられていた墓塔が、次第に複数の法名戒名を連記するようになっていく様子がわかる。単記から二名連記、三名以上へとそれぞれの刻銘型式はほぼ百年毎に段階的に初現し、現代まで続いてきている。単記の墓塔ばかりでは広い土地が必要となってくるし、また、側面などへの刻記を可能にした型の変遷などもあろう。しかし、人々の墓塔に対する意識に変化が生じたことこそが複数併記をうんだ土台となっているはずである。

江戸時代中期までは単記が主流だが、一方で二名連記が数を大きく伸ばしている。江戸後期と明治期、二名連記が多いものとの差は縮まってくる。大正以降は「□□家之墓」型式が主流となる。

複数連記の場合の組合せについてその数を表11に割合であらわしてみた。二名、三名以上ともに「男女」の組合せが大半を占めている。この組合せは夫婦であると考えられるが、三名以上の場合には二世代以上の夫婦や親子関係であろう。これらのことから十八世紀に入った頃に一つの墓塔に夫婦、親子の戒名が併記されるようになり、年代を下るに従いその範囲がタテ方向に広がり、

「先祖代々」という表現が銘文上に現われるようになっていったことがわかる。

次に墓塔正面の銘文中の文字について少し触れておきたい。法名、戒名の下に刻まれた文字を見ると、それは「菩提」系、「靈位」系の二つの系統に分けることができる。ただし、戒名のみで、その下に刻記のないものも全体の四分の一に認められる。これらは出現に年代差はないが、「菩提」系は江戸時代初期のものに多く、中期以降は「靈位」系がほぼすべてを占める。そして、近代に近づくほど戒名のみものが増えてくる。仏像碑、板碑型石塔には、「為(戒名)菩提也」、あるいは「(戒名)菩提」としたものが多いい。初期の仏像碑においては、「奉造立(仏・菩薩名)為(戒名)菩提也」というような刻記も見られる。「菩提」と記すことは、文字通り菩提をとむらう、冥福を祈るという目的で墓塔を造立したことをあらわしている。しかし、十八世紀以降は、どのような型式の墓塔においても「靈位」「各靈」など、戒名の下に「靈」の字を刻むのが圧倒的になる。また、単に、「靈」や「位」とした形も、特に年代を下るに従い多くなっている。「靈位」系の刻記型式は、そこに靈魂を祀っているということを表わすもので、墓塔が靈の依代としての性格を帯びていることを示している。

明治以降、戒名のみものが大部分となってくるが、一方で新しい型式が出現する。「○○之墓」という型式である。これは、大正期に出現する「□□家」型の刻記型式とともに見られるようになるもので、それ以前にはない。「○○之墓」型式の場合、この「○○」の部分に記される文字は「□□家」「先祖代々」などで、戒名が記された例は一つもない。「□□家之墓」という刻記は、

表 9 刻銘型式の年代別推移

単位：基

刻銘型式 年 代	単 記	2名連記	3名以上 連 記	「先祖代 々」 型	「□□家」 型	計
1620～1690 寛永～元禄	143	39				182
1700～1770 宝永～安永	240	201	41			482
1780～1860 天明～慶応	101	178	121	8		408
1870～1900 明 治	23	56	48	8		135
1910～ 大正・昭和	16	38	62	18	73	207
計	523	512	272	34	73	1,414

表10 各刻銘型式の出現状況

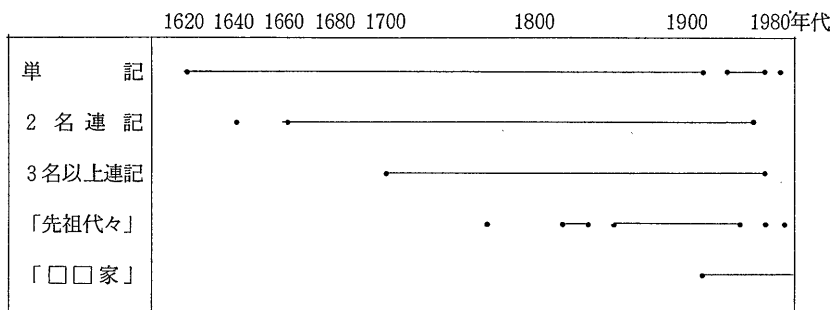


表11 連記の組合せ

単位：％

組合せ 刻銘型式	男・女	同 性	幼児のみ	幼 児 と 男・女
2 名 連 記	78.2	4.5	7.3	8.0
3 名 以上 連 記	62.0	0.7	7.3	29.1

いわば家の入口にかける表札と同じ機能を持つものといえる。このことから、「霊の依代」「他界との接点」という考え方の発展形として、墓塔は「死後の住居」というような見方がなされるようになってきたのではないかと思うのである。

大正以降の個人単位、墓塔には戦死者や、生前立派な業績を残したり名誉を得た人などのものが多く目についた。これらの墓塔には生前の地位や功績その他の文が刻まれているのだが、こうしたことはそれ以前の墓塔には見られなかったことである。これは、戦死など異常死した者に対する特別な供養の念の表われであるとともに、また、墓塔に顕彰碑的な性格が付加されたことを示す例であるといえる。

四 まとめ

近世の墓塔としてこの墓地内で最古のものは、十七世紀初期の五輪塔、宝篋印塔であった。しかし、これらは僧職者のものが多く、庶民階層の墓塔として明らかなものでは、少し遅れて十七世紀中期に現われる仏像碑や板碑型石塔が最も古いものである。

仏像碑に彫られていた仏像は数種類あるが、地藏像、観音像が特に多く、約四割づつを占めていた。女性の場合は観音、幼児は地藏というように特徴づけることが可能だったが、男性は地藏が半数でその他の像も多く見られた。造立割合は女性が高く、幼児も多いということができるが、全体に見てそれほど大きな差があるとはいえない。また、仏像碑は造立当初の頃は男性のものが多く、次第に女性の為の造立が盛んになり、後に幼児の為の割合が高くなるという推移があった。

十八世紀に入ると、初期には仏像碑、板碑型が最盛期であるが、一方で新しい型式が出現して、このころが最も多様な型式の墓塔が造立された時期となる。中期には前の二つの型式は減少し、かわって箱型が主となる。また、この年代には種子を持つものが九割近くにのぼる。種子では、全年代を通して「ア」種子が圧倒的である。刻銘型式では、二名連記が単記を上回るようになり、三名以上の連記も出現する。戒名の下に刻まれる文字は、それまでの「菩提」から「霊位」系統へと主流が移る。

十八世紀後期には、引続き箱型が主だが、江戸時代末期の十九世紀前半の頃になると角柱型が主流となる。この時期には二名連記が最も多く、次に三名以上の連記で、「先祖代々」型も現われる。種子は減少し始める。

明治時代に入るとともに、いくつかの点で大きな変化がおきる。墓塔の型式では、角柱型、箱型を除く多くの型式が消滅し、また家紋を持つものが六割以上となって、種子との割合において数値的に前時代とはまったく入れ替わる。段数でも前時代まで二割に満たなかった三段組以上のものが、明治以降は七割以上となるのである。戒名のみで、その下の刻記がないものも増加してくる。

大正時代以降、「□□家之墓」型の刻記型式が現われ、そしてこれが最多となる。家紋刻記は七割以上にのぼり、戒名のみものがこれにつぐ。また、顕彰碑的な墓塔も出現する。

第二次大戦後は九割以上が角柱型で、大多数が「□□家之墓」型式の刻銘となっている。

以上のことから、近世の墓塔の持つ意義の変遷について考えてみよう。

十七世紀の造立当初においては、墓塔の型式、銘文に見られるように、仏・菩薩による救済をもって極樂往生することを願う、個人の爲の供養塔としての役割が強かったようである。また、台座に見るようにすでに礼拝の対象となっており、他界との接点、そして靈の依代としての性質も併わせ持っていたことがわかる。女性の場合は観音、幼児は地藏に救済を願うという例が多いのは、これらの信仰の流行との関連が深い。これは、その当時、仏像を彫って供養しなければ成仏しにくいような性質を、女性、幼児の場合特に持たされていたことを示唆しているよう。

十九世紀も、種子刻記が多いことから、仏・菩薩による救済を願う気持ちも大きいものだったと推察される。しかし、刻記型式は、個人単位から夫婦単位へと変化している。このことは、同じ墓塔に祀ることによって、他界においても夫婦ともにいっしょにいられるのだと考えていたことを表わしている。連記の範囲は、次第に二世代から先祖代々へとタテに広がりを見せるが、これは「家」觀念の強化を示すものであろう。

明治に入るとともに、種々の面で古くからの型式と新しい型式とで逆転がおこる。角柱型、箱型以外の型式の造立はほとんど行なわれなくなり、段をより高く積もうとする傾向が強まる。種子刻記によって仏の救済を願う気持ちから、死後もまた家族や先祖といっしょになりたいという考え方に意識が移り、家紋刻記が盛んになる。特に、大正以降現代まで、家単位の刻銘がほとんどになるが、これは墓塔が、死後の靈の住み家とでもいうような役割を持ったことを表わしているものだと見える。このころになると、個人で祀られる墓塔はほとんど、異常死などで特に供養の必要が

あるものか、あるいは新しく出現した、顕彰碑的性質のものに限られるようになってくる。

このように、まず、墓塔の性格としては、当初、供養塔であり、礼拝の対象、他界との接点、靈の依代としての役割を持っていたものが、靈魂の住み家というような機能を帯びてきたということがいえる。また、個人単位で造立されていたものが、「家」觀念の強まりによって、夫婦、家へと範囲が拡大していき、種子から家紋へと刻記も移行した。このことは、仏の救済によって極樂往生を願う形から、先祖や夫婦、親子が死後また同じ所へ行き楽しく暮らしたいという願望へと人々の意識に変化があったことを語っている。つまり、死後の拠が、仏から「家」へと移ったということである。

造立当初の墓塔の性格は消え去ったのではなく、現代の墓塔も供養塔であり、礼拝の対象であることも今まで述べてきたことから明らかであろう。そして、型式等に変遷は見られはしたが、近世から現代に至るまで、墓塔造立の目的とするところは、死者の靈を安定した状態にする為であるという点で、変化はないといえるのである。

もちろん未解決の問題が多く残っており、また、今後、これがこの地域の両墓制成立ともどの程度のかかわりを持つてくるものなのかも合わせて考えていくべきであろう。しかし、いづれにせよ、この分析により、民間の信仰について考える上で、興味深い種々の事柄を浮彫にすることができたと思われるのである。

註

(1)

出土例については、『新座市史調査報告書四・新座の金石文』を参照されたい。

(2)

芝山彦十郎政勝の墓塔は、『新編武蔵風土記稿』によると、同じ大和田内で川越街道の北側に位置した向善寺の境内にあり、「(前略)コノ墓石ハ子孫ニ至リテ菩提ノ為ニ造立セシモノニテイトアタラシキモノナリ」とされている。なお、『武蔵国新座郡村誌』(明治八、九年)によれば、向善寺は「明治の初廃して今は民有の林藪となる」とある。

(3)

五輪塔の最も古い銘は以下の通りである。

(正面)

為法導
榮

ㄥ ㄥ ㄥ ㄥ ㄥ

无上菩□也

(右側面)

寛永五年□

(左側面)

五月廿日□

(4)

宝篋印塔の最古のものは基礎部分のみであるが、銘文は以下の通りである。

(正面)

寛永十四年

地 誓誓道本

還去 靈位

禪定門

(5)

九月十六日
仏像碑で最古のものは如意輪観音像であり、銘文は以下の通りである。

(正面)

為妙永禪定尼菩提

𑖀𑖳𑖫𑖞

寛□廿癸未年正月□日

(6)

板碑型石塔の最古の銘文は以下の通りである。

(正面)

寛永十二乙亥歲

𑖀𑖳𑖫𑖞

為如清禪定尼菩提也

四月十八日 施主細沼

正保四丁亥歲 權左エ門

𑖀𑖳𑖫𑖞

為道林禪定門菩提也

十月十七日

(7)

無縫塔の最古の銘文は以下の通りである。

(正面)

承應二年癸巳

□□尊蓮社松譽和尚

八月十二日

(8)

箱型の最古のものの銘文は以下の通りである。

(正面)

𑖀𑖳𑖫𑖞

𑖀𑖳𑖫𑖞

靈位

(右側面)

宗 元禄八乙亥六月二日
善 貞享四丁卯四月十六日

(左側面)

施主

内田勘右衛門

(9)

角柱型で最古のものの銘文は以下の通りである。

(正面)

享保元辛酉天

刊

□月妙圓信女靈

十一月四日

(左側面)

大和田町施主

須藤万□

(10)

仏像碑の地藏像で最も古いものの銘文は以下の通りである。

(正面)

浄心禅定門

施主

明暦元乙未九月九日 細沼市□□

(11)

具体的には仏像碑に以下のような銘文を見ることができる。

(正面)

奉造立如意輪觀音臺尊

為種譽妙樂禪定尼菩提也

㊦

延宝四丙辰天霜月二日

施主 皆川惣四良

(12)

最も古くは、明治末期にも以下に示した銘文を持つものが一基存在している。

(正面)

故埼玉県巡查窪田松太郎墓

(右側面)

明治三十七年五月十一日為兇賊逮捕之殯

明治四十三年五月十一日

大和田町有志建之

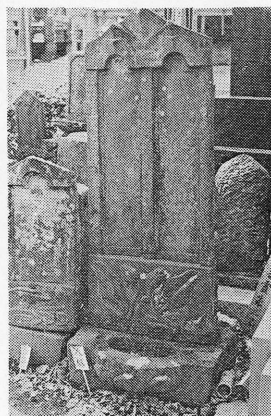
付記…本稿を書くにあたっては、調査資料の使用について、市史編纂室より特別の許可をいただいている。この点を特に記しておくことにする。



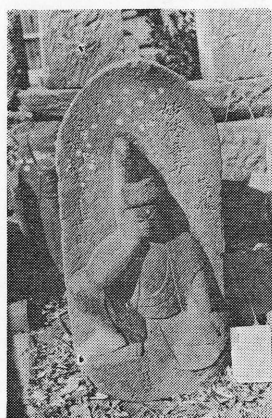
左：丸彫地藏像
中央・右：宝篋印塔



左・中央：五輪塔
右：無縫塔



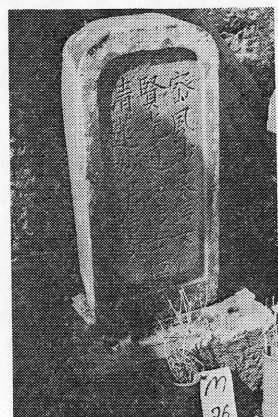
前列二基とも板碑型石塔



仏像碑（如意輪観音像）



仏像碑（地藏像）



箱型石塔